

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2009

課題番号：18520028

研究課題名（和文）デーヴィッド・ヒュームに潜む目的論の研究：近代哲学の再構築に向けて

研究課題名（英文）Study of the Hidden Teleology in David Hume: Toward a Reconstruction of the Modern Philosophy

研究代表者

矢嶋 直規（YAJIMA NAOKI）

敬和学園大学・人文学部・教授

研究者番号：10298309

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・哲学・倫理学

キーワード：ヒューム、近代哲学、認識論、道徳論、因果論、外的物体論、正義論、社会契約説

1. 研究計画の概要

(1) ヒュームの『人間的自然論』の知識論、情念論、道徳論がどのような関係にあるのかを明確にすること。とりわけ、その知識論が自然主義的な議論によって道徳論を基礎付けていることを明確にすること。

(2) ヒュームの知識論が近代科学の対象であった物理的世界についての理論を人間にとっての自然的世界として道徳哲学化することにより、デカルト・ロックらの目的論批判を推し進め、近代哲学に新しい展望をもたらしていることを指摘し、従来の哲学史の再構築を促すこと。

2. 研究の進捗状況

(1) ヒューム知識論の中心的主題である「抽象観念論」、「空間時間論」、「因果論（信念論）」、「外的物体論」が相互に論理的な関連を持つことを示した。それらの議論に通底するのはヒューム独自の「自然」概念の提示である。近代哲学において自然は、まず自然科学の対象としての物質であり、そして普遍的道徳としての法であった。ヒュームがこうした分裂した「自然」を人間的な自然として捉えなおすことにより、自然認識と道徳認識をと同一の原理によって説明し、狂信や迷信の根拠となる独断的形而上学を批判し、公共性のある道徳原理を提示していることを、当時の「人性論争」との対比において論じることができた。

(2) より具体的には以下の点について研究を進めた。

① ロックにおいて理性の産物とされる「抽象観念」がヒュームにおいては習慣の産物とされ自然の働きが道徳的信念を含むすべての信念の基礎となっていることを示し、それと道徳判断を可能にする視点としての「一般的観点」の関連を考察した。

② 「空間時間論」はヒューム研究の盲点となっており、特に道徳論との関係が指摘されることは皆無であるが、人間的世界の秩序の認識の理論として意義を持つことを指摘した。

③ ヒュームの因果論がロックの「力」の概念を対象に内属するものとしてではなく、対象相互の関係を一般的に捉え、世界に存在する事物についての安定した信念を説明する理論であることを論じた。

④ ヒュームの外的物体論をデカルトの延長概念と比較し、客観性の概念を公共的な知覚の信念として提示した。

こうして私は、ヒュームの認識論の中心的主題をデカルト、ロックらと比較しながら、それぞれが重大な道徳哲学的含意を持つことを具体的に論証した。他方、ヒュームの道徳哲学プロパーの主題である「共感論」、「正義論」、「約束論」、「一般的観点」、「道徳の理由」を知識論との関連において解明することができた。

3. 現在までの達成度

① 当初の計画以上に進展している。

本研究は当初の計画通り進められており進捗状況は良好である。当初予定していなか

ったヒュームとキリスト教神学の関係を考察し発表することができ、計画以上の成果も生まれている。ヒューム研究者以外の哲学者から私の理論に関心を示す研究者が現れていることに進捗の手応えを感じている。

4. 今後の研究の推進方策

(1) 研究の最終年度に当たり、これまでの独立の論稿を一つながりのものとしてまとめたい。結論に当たる考察において、ヒュームの哲学がデカルトに始まるアリストテレス的目的論を完全に解体し、それが近代的な道徳理論を生み出していることを明確にしたい。

(2) この研究は単にヒュームの訓詁学的注釈ではなく、近代哲学史全般、さらには近代そのものの学問論的、文化論的な捉えなおしに通じるものである。この点をいわゆるヒューム研究の専門家のみならず隣接分野の研究者に訴えていくことが重要である。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

- ① 矢嶋直規、「ヒュームにおける「道徳の理由」：「狡猾な悪人」をめぐって」、『哲学』(日本哲学会)第61号、2010、掲載確定。査読有り。
- ② 矢嶋直規、「ヒューム外的物体論の道徳哲学的意義」、『倫理学年報』、第58集、2009、109-123。査読有り。
- ③ 矢嶋直規、“Moral Sentiments and the General Point of view”，『敬和学園大学研究紀要』第18号、2009、29-67。査読無し。
- ④ 矢嶋直規，“Promise and the Allegiance to the government in Hume”，『敬和学園大学研究紀要』、第17号、2008、37-66。査読無し。
- ⑤ 矢嶋直規，“Justice and the General Point of view in Hume”，『敬和学園大学研究紀要』第16号、2007、35-63。査読無し。

[学会発表] (計4件)

- ① 矢嶋直規、『ヒュームにおける道徳の理由：「狡猾な悪人」をめぐって』、日本倫理学会、2007. 10. 13、新潟大学。
- ② 矢嶋直規、『ヒューム『人間的自然論』における空間時間論の意義』日本イギリス哲学会研究大会、2007. 3. 28、同志社大学。
- ③ 矢嶋直規、『ヒューム「人間的自然論」のキリスト教神学』京都ヘーゲル読書会、2006. 7. 2、京大会館。

④ 矢嶋直規、『ヒュームのシンパシー論と共同体の形成：ホッブズ批判の視点』、日本哲学会、2006. 5. 21、東北大学。

[図書] (計1件)

日本イギリス哲学会編、『イギリス哲学・思想事典』、研究社、2007、105-107。

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

[その他]